

対人場面におけるあいまいさへの非寛容が新入学生の 適応過程に及ぼす影響¹⁾

Interpersonal Intolerance of Ambiguity and Adjustment Process of College Freshmen

友野 隆 成

橋 本 宰

Takanari TOMONO

Tsukasa HASHIMOTO

同志社大学大学院文学研究科
Graduate School of Psychology,
Faculty of Letters,
Doshisha University

同志社大学文学部
Department of Psychology,
Faculty of Letters,
Doshisha University

問 題

大学・短大生活は高校までの学校生活の枠組みから離れ、自由度が高く、様々な集団的圧力や拘束も弱いものである。そのため、入学直後は様々な情報を取捨選択し、自分の意思決定で行動する場面が多くなっていく。また、その時期は高校生活までの慣れ親しんだ人間関係と離れ、見知らぬ人たちと出会い、新しい人間関係を構築する状況にも直面する。この状況は、Budner (1962) によるあいまいさの構成要素である新奇性・複雑性・不可解性のうち、新奇性に対応すると考えられる²⁾。これらを含めると、大学・短大入学直後は特に対人行動で非常にあいまいな状況と言えよう。そこから、そのような状況と今までの生活パターンとのギャップに戸惑い、不適応症状を呈する者が出てくることが推測される。

このような大学・短大入学直後の適応に影響を与えることが想定されるパーソナリティ特性として、対人場面におけるあいまいさへの非寛容 (interpersonal intolerance of ambiguity: 友野・橋本, 2005) が挙げられる。この特性はあいまいさへの非寛容 (Budner, 1962; Frenkel-Brunswik, 1949,

1954) を対人場面に限定したものであり、他者との相互作用において生じたあいまいさに耐えることができず、抑圧や否認、回避行動など不適応的な反応を示すものである。

そこで本研究では、対人場面のあいまいさに非寛容な者は寛容な者に比べて、入学直後の新しい人間関係で生じるあいまいさに耐えられないので、心身ともに不健康な状態が持続しやすい、という仮説を立て、3回の調査で経時的に検証することを目的とする。

方 法

調査協力者および調査時期

2003年4月に大学および短大に入学した新入学生を対象に、3回の質問紙調査を実施した。本研究では、3回の調査全てに有効回答した72名(男子21名、女子51名)を分析対象にした。平均年齢は18.32歳(SD=0.60)であった。なお、1回目の調査(時点1)は大学入学直後の4月中旬に、2回目の調査(時点2)は約1ヶ月後の5月下旬に、3回目の調査(時点3)は更に約1ヶ月後の7月上旬に、それぞれ実施した。

測 度

1. **あいまいさへの非寛容** 友野・橋本(2005)によって作成された、改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(IAS-R)を用いた。この尺度は17項目から成り、初対面の関係におけるあいまいさへの非寛容(項目例:初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます。)、半見知りの関係におけるあいまいさへの非寛容(項目例:あいさつぐらいいしかしらない人をその日、二度目に見かけた時、どう接してよいのかわかりません。)、友人関係におけるあいまいさへの非寛容(項目例:友達の買い物に付き合っ物を選ぶ時は、何が欲しいのかはっきりして欲しいです。)の3つの下位尺度がある。各項目についてどの程度同意するか、それぞれ「とても強く同意する(7点)」から「全く同意しない(1点)」までの7件法で回答を求めた。これらは、3つの対人場面ごとに、あいまいさに耐えられないほど

- 1) 本研究は、日本パーソナリティ心理学会第13回大会においてパネル発表された内容の一部をまとめたものです。本論文を作成するにあたり、審査者の先生方から貴重な御意見を頂戴致しました。記して、感謝申し上げます。また、複数回にわたり調査に御協力いただいた方々にもお礼申し上げます。
- 2) Budner (1962) はあいまいさを、“十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態”と定義し、“(1) 手がかりが全くない完全に新しい状況、(2) 手がかりがたくさんありすぎる複雑な状況、(3) 手がかりが異なった事態を招くような矛盾した状況”があると考え、それぞれ“新奇性 (novelty)、複雑性 (complexity)、不可解性 (insolubility)”と名づけている。

Table 1 各群の中央値と人数

	初対面の関係における あいまいさへの非寛容 (Med=25)		半見知りの関係における あいまいさへの非寛容 (Med=22)		友人関係における あいまいさへの非寛容 (Med=19)	
	非寛容群	寛容群	非寛容群	寛容群	非寛容群	寛容群
人数	35	37	34	38	35	37

Table 2 各群における GHQ 下位尺度の平均値と標準偏差

		身体的症状				不安・不眠				社会的活動障害				うつ状態			
		非寛容群		寛容群		非寛容群		寛容群		非寛容群		寛容群		非寛容群		寛容群	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
初対面の関係における あいまいさへの非寛容	時点1	8.54	3.97	7.46	3.66	9.37	4.12	7.84	4.10	7.60	3.17	6.30	2.32	4.89	5.46	3.35	4.74
	時点2	9.49	3.92	7.43	4.51	9.86	4.33	8.24	5.22	8.43	3.95	7.30	2.91	4.86	5.42	3.73	5.48
	時点3	9.29	4.77	5.97	5.17	9.86	3.71	7.41	4.60	7.51	3.80	7.54	3.83	5.23	5.74	3.05	5.10
半見知りの関係における あいまいさへの非寛容	時点1	8.32	4.15	7.68	3.54	9.21	4.10	8.03	4.18	7.74	2.96	6.21	2.53	4.62	5.44	3.63	4.85
	時点2	8.76	4.30	8.13	4.39	9.76	3.99	8.37	5.46	8.38	3.95	7.37	2.96	5.26	5.76	3.42	5.06
	時点3	8.41	5.47	6.84	4.95	9.26	4.27	8.00	4.37	7.38	3.97	7.66	3.67	4.79	5.77	3.50	5.23
友人関係における あいまいさへの非寛容	時点1	7.51	4.34	8.43	3.26	8.66	4.41	8.51	3.96	7.34	3.07	6.54	2.56	4.11	5.38	4.08	4.95
	時点2	8.20	4.73	8.65	3.97	9.00	4.89	9.05	4.87	8.26	4.07	7.46	2.81	4.94	5.65	3.68	5.25
	時点3	7.80	5.69	7.38	4.80	8.89	4.68	8.32	4.05	7.31	4.08	7.73	3.54	4.43	6.06	3.81	4.95

得点が高くなるように構成されている。分析には、3つの下位尺度それぞれの合計得点を算出して用いた。

なお、IIAS-R はほぼ十分な信頼性と妥当性を兼ね備えた尺度であることが、友野・橋本 (2005) によって確認されている。

2. 精神的健康度 中川・大坊 (1985) による、日本語版一般精神健康調査票 (GHQ) の 28 項目短縮版を用いた。この尺度は身体的症状、不安・不眠、社会的活動障害、うつ状態の 4 つの下位尺度がある。この尺度は項目によって選択肢の内容が異なるが、それぞれ 4 件法 (0 点~3 点) で回答を求めた。分析には、各下位尺度の合計得点を算出して用いた。

手続き

授業時間中に質問紙を配布、約 1 週間の提出期限を設け、後日回収した。時点 1 では IIAS-R、GHQ を実施し、時点 2 および時点 3 では GHQ を実施した³⁾。

結果と考察

対人場面におけるあいまいさに寛容か否かで、大学入学直後、約 1 ヶ月後、前期末の 3 時点で精神的健康度にどのような差が見られるか検討するために、2 要因 (対人場面におけるあいまいさへの非寛容・寛容 × 測定時点) の分散分

析を行った。分析に先立ち、対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度の 3 つの下位尺度ごとに中央値を算出し、その値をもとにそれぞれ非寛容群と寛容群にグルーピングした。各群の中央値と人数を、Table 1 に示す。

分析は、GHQ の 4 つの下位尺度ごとに行った。Table 2 に、各群における平均値と標準偏差を、それぞれ GHQ の下位尺度ごとに示す。その結果、初対面の関係におけるあいまいさへの非寛容の有意な主効果 ($F(1,170)=6.48, p<.05$) および有意な傾向である交互作用 ($F(2,140)=2.38, p<.10$) が、身体的症状においてみられた (Figure 1)。

単純主効果の検定の結果、時点 2 と 3 において初対面の関係におけるあいまいさへの非寛容の単純主効果が有意であった。この結果は、入学直後は初対面の関係におけるあいまいさに非寛容な者と寛容な者とに差はないが、時間が経過するにつれ身体的な適応に差がみられることを示唆している。また、初対面の関係におけるあいまいさへの寛容群において測定時点の単純主効果が有意であった。多重比較の結果、時点 1 および 2 に比べて、時点 3 の身体的症状得点に有意に低かった。この結果は、初対面の関係におけるあいまいさに寛容な者は時間が経過するにつれ身体的症状が緩和されることを示唆している。

さらに、初対面の関係におけるあいまいさへの非寛容の有意な主効果 ($F(1,170)=4.36, p<.05$) が、不安と不眠において見られた (Figure 2)。この結果は、時期に関わらず初対面の関係におけるあいまいさに非寛容な者が寛容な者に比べて相対的に不安と不眠を訴えていることを示唆している。

なお、これら以外の変数の組み合わせに有意な主効果お

3) 本研究では、日本健康心理学研究所 (1996) によるストレスコーピングインベントリー (SCI) も同時に施行されたが、分析からは除外された。

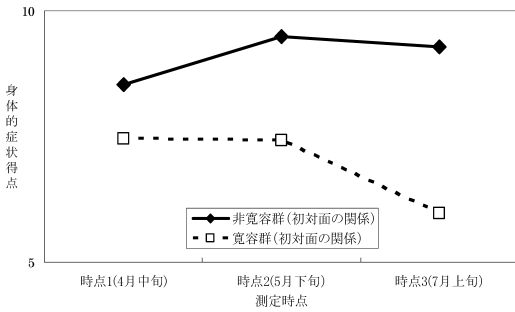


Figure 1 身体的症状得点の経時的変化

よび交互作用はみられなかった。

結 論

初対面の関係におけるあいまいさに非寛容な者は、時間が経過しても依然として不適応状態が持続していることが示されたが、寛容な者は時間経過とともに適応していく傾向があることが示された。結論として、初対面の関係において生じるあいまいさに入学時の段階で耐えられる程度が、その後の大学・短大生活への適応に影響を与えることが示唆された。

一方、半見知りの関係におけるあいまいさへの非寛容および友人関係におけるあいまいさへの非寛容では、有意な主効果はみられなかった。入学直後は初対面の対人関係が大きなウェイトを占めており、半見知りや親しい友人関係のインパクトが相対的に小さくなったために、上記のような結果がみられたのかもしれない。また、時点2でも入学直後からわずか1ヶ月程度しか経過していないので、両時点の間の対人関係に大きな変化がなかったように思われる。時間が経過すれば、友人関係におけるあいまいさへの非寛容の影響が現れてくる可能性も考えられるので、今後は測定時点のスパンを延ばし、更なる経時的変化を検討する必

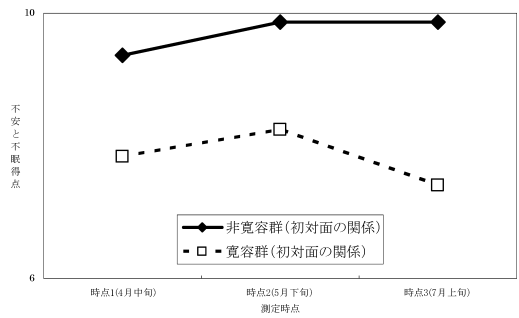


Figure 2 不安と不眠得点の経時的変化

要があるように思われる。

引用文献

- Budner, S. 1962 Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, **30**, 29–50.
- Frenkel-Brunswik, E. 1949 Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, **18**, 108–143.
- Frenkel-Brunswik, E. 1954 Further explorations by a contributor to "The Authoritarian Personality." In R. Christie, & M. Jahoda (Eds.), *Studies in the scope and method of "The Authoritarian Personality"*. New York: Free Press. Pp. 226–275.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 日本健康心理学研究所 1996 ストレスコーピングインベントリー 自我態度スケールマニュアル——実施法と評価法 実務教育出版
- 友野隆成・橋本 宰 2005 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 220–230.

— 2005. 2. 3 受稿, 2005. 6. 24 受理 —